昭和10年前後までの陸軍飛行場

飛行機庫図鑑【その3・立川】

横川裕一
Text by Yuichi YOKOKAWA

立川飛行場の航空写真で、東から西方向への撮影。手前（東）側が飛行第五連隊で、その右端に第五飛行機庫（材料廠庫）が昭和４年秋に建てられるが、それはまだ見えていない。奥（西）側の画面右手が陸軍航空本部技術部で、昭和３年８月に所沢からの移転。その左手が民間施設だが、日本航空輸送の格納庫（昭和４年６月竣工）は見られないことから、昭和３年夏から昭和４年春口くらいの撮影であろう。

立川飛行場の歴史概略

立川は、大正10（1921）年６月、帝都防空用の航空第五大隊敷地に選定された。翌年夏には飛行場は完成、秋には飛行第五大隊と改編された同隊が移駐した。

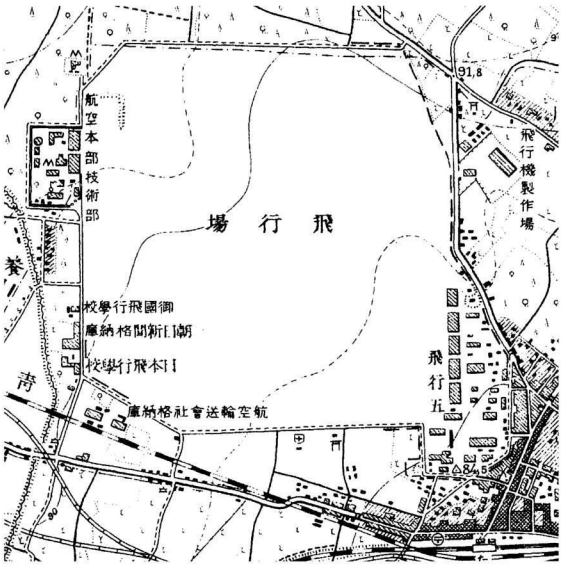
一方の飛行場西側には、関東大震災（大正12年９月）後に民間航空施設が居を構えており、昭和３（1928）年８月、その北に陸軍航空本部技術部が移転してきた。昭和６年８月の羽田開場と昭和８年10月の陸軍航空本部補給部所沢支部の移転により民間施設は退去し、立川支部と改称していた同支部は昭和10年８月に陸軍航空廠立川支廠となった。

以上のように、立川は単なる部隊基地だけでなく陸軍航空技術のメッカ、資材物資の中継・補給地としても役割を果たした。

戦後の米軍駐留を経て飛行場は返還され、現在は、陸上自衛隊立川駐屯地、国営昭和記念公園ほかとなっている。

立川の飛行機庫

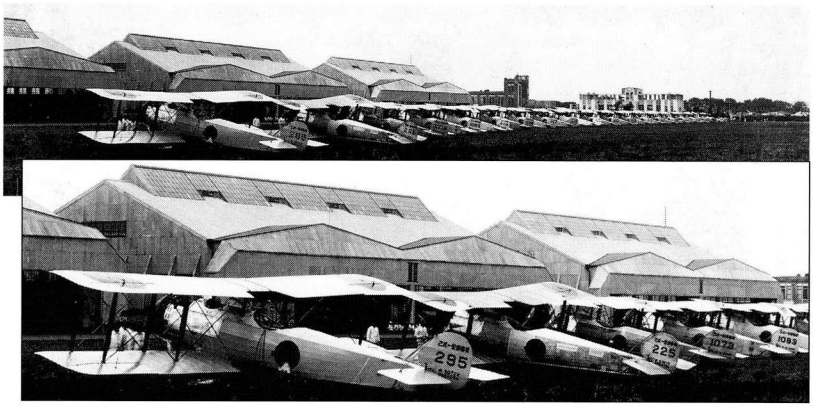
大隊の施設は飛行場東側に設置された。タイトル写真にあるように、第二世代の飛行機庫が４つも並ぶのはここ立川だけの壮観である。昭和になって石川島飛行機製作所がその北側に工場を設けた。



【図１】 昭和５年の飛行場。（国土地理発行・２万５千分の１地形図「府中」、昭和５年７月発行から）。

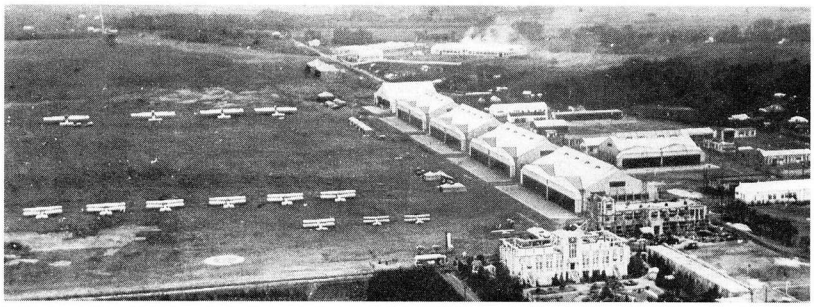
【表１】 所沢飛行場概略史

年		陸軍	立川（東地区）	立川（西地区）
1909	明治42	７月、臨時軍用気球研究会創設。		
1910	明治43	12月19日、代々木練兵場にて、徳川大尉初飛行。		
1919	大正８	１月、フォール大佐らフランス航空教育団による教育開始。 ４月、陸軍航空本部設立。		
1921	大正10		６月、航空第五大隊敷地として選定。	
1922	大正11	８月、航空大隊、飛行大隊に改編。	３月、地鎮祭。 夏、飛行場完成。 11月、飛行第五大隊が各務ヶ原から移駐。	
1925	大正14	５月、飛行大隊、飛行連隊に改編。	５月、飛行第五大隊、飛行第五連隊に改編。	
1928	昭和３			８月、陸軍航空本部技術部、所沢から移転。
1930	昭和５		３月、石川島飛行機製作所、月島から立川に移転。	
1931	昭和６	９月、満州事変。	１月、石川島飛行機の大組立工場、竣工。	
1933	昭和８			５月、陸軍航空本部技術部に行幸。 10月、陸軍航空本部補給部所沢支部が所沢から移転。立川支部に改称。
1935	昭和10			８月、立川支部、陸軍航空廠立川支廠へ。技術部、技術研究所へ。

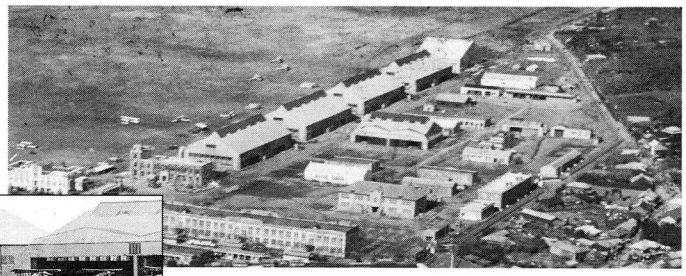


【写真１①】 乙式一型偵察機の30機以上の列線と、その奥に見える飛行機庫（左から第三、第二、第一）に、本部と将校集会所。下写真は第二、第一飛行機庫のアップで、開口部にローマ数字で飛行機庫番号（中隊番号）を標示しているのが見える。ただし、第四飛行機庫は「Ⅳ」ではなく、後述するような「Ⅲ」標記であった。乙式一型偵察機は尾翼（方向舵）に機体番号を記していることから、昭和２年秋までの撮影と推測される。

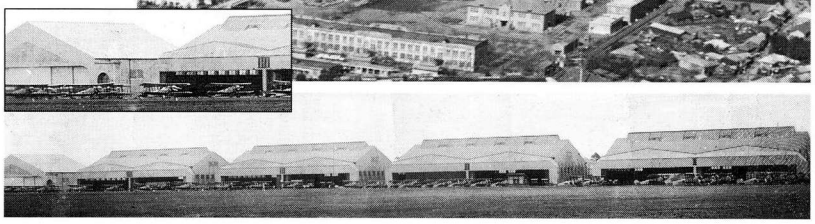
【写真１②】 上の１①写真と同じ飛行機庫群を南から撮影した一葉。画面左側が図１に示す飛行場で、縦一列に４棟並んでいる飛行機庫の右側（画面中央）に、１棟が異なる向きで配置されているのが分かる。これが、整備隊の格納庫である。



【写真１③】 ４つ並んだ飛行機庫の奥（画面上方）に、やや背の高い第五飛行機庫が写る一葉。材料廠向けの第五飛行機庫は、昭和４年秋に竣工とされる。また、中央やや右手奥に建物が見えるが、昭和３年ころから建設が始まった石川島飛行機製作所の工場である。飛行場の列線は、前列（手前）から乙式一型偵察機と２機の甲式四型戦闘機（右側）、中列が６機の八七式軽爆撃機、奥列が４機の八七式重爆撃機。八七式の両爆撃機は立川に在籍していない機種で、浜松から飛来した飛行第七連隊機であろう（当時の絵葉書から）。



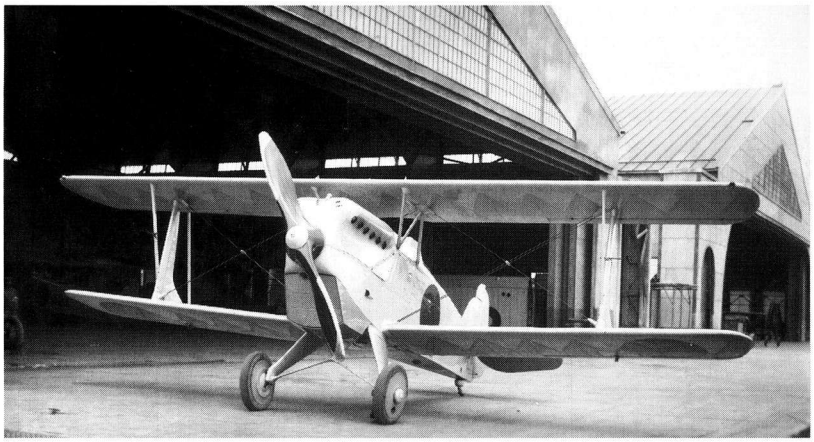
【写真１④】 飛行場を南東から見た一葉で、第五飛行機庫が白く見えている。2014年４月にオープンした「IKEA立川」は、この第五飛行機庫の跡地の北側（写真では右上側）に接するあたりにある。



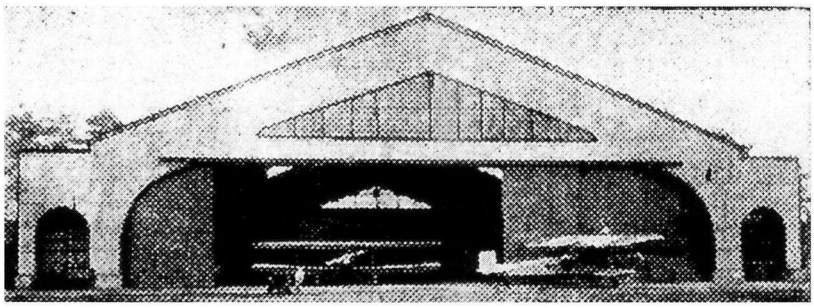
【写真１⑤】 飛行場側から見た飛行機庫群。左上のアップ写真では、第四飛行機庫の「Ⅲ」が見える。その左が第五飛行機庫で、両脇のアーチ型出入り口に、開口部上部の大きな採光窓と、第三世代飛行機庫の特徴を持つ飛行機庫であることが分かる。

【写真１⑥】 飛行機庫が塗られている写真で、印象がかなり変わっており、飛行機庫番号が目立っている。さらに、第五飛行機庫の屋根に４つの換気口が付与されたことも分かる。この写真は、昭和11年に飛行第五連隊で編成された飛行第二大隊を写したものと、筆者は推測する。

【写真２①】 昭和３年12月２日に行なわれた、昭和天皇即位記念の御大典飛行時の陸軍大観兵式時の立川飛行場。飛行第五連隊側から技術部側を写している。見えている飛行機庫は昭和３年に竣工したもので、下写真（写真２②）の手前に見えているものである。

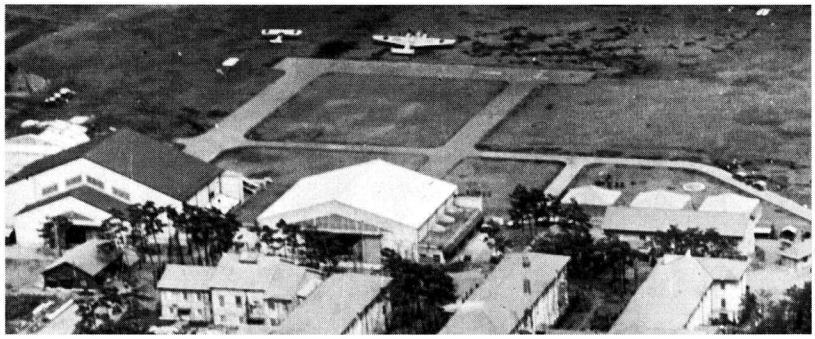


【写真２②】 陸軍航空本部技術部の飛行機庫（奥が昭和５年竣工のもの）前のKDA-5（後に九二式戦闘機）で、陸軍で審査を受けた３号機とされる。本写真は『日本航空機辞典』などで従来から知られたものであったが、飛行機庫の見え方が逆であり、裏側（飛行場側でない側）の撮影なのかと考えていたが、裏側は本ページ最下段に見える状況であること、プロペラの回転方向もBMW-6の時計回りと一致していないことから、従来の写真は裏焼きであると判断する。左に掲載の方向が正しい向きである。なお、この手前側の飛行機庫は戦中・戦後を生き残り、昭和55年秋に解体された。

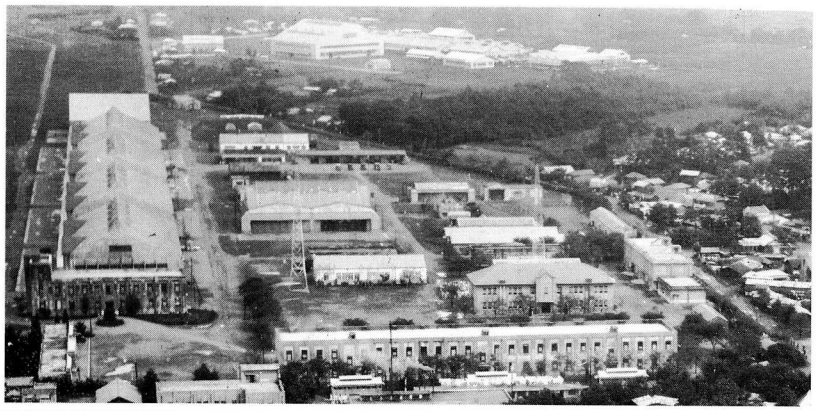


【写真２③】 昭和５年７月９日付の東京日日新聞（府下版）に掲載の記事、陸軍航空本部技術部の「新格納庫の竣工近し」の記事写真。本庫は九二式重爆撃機を格納できるよう、クレーンを内蔵していたとも言われるが、明らかにできていない。確かに、九一式戦闘機（120号機）背景に本庫が写る写真では、中に九二式重爆撃機が収まっているものもある。

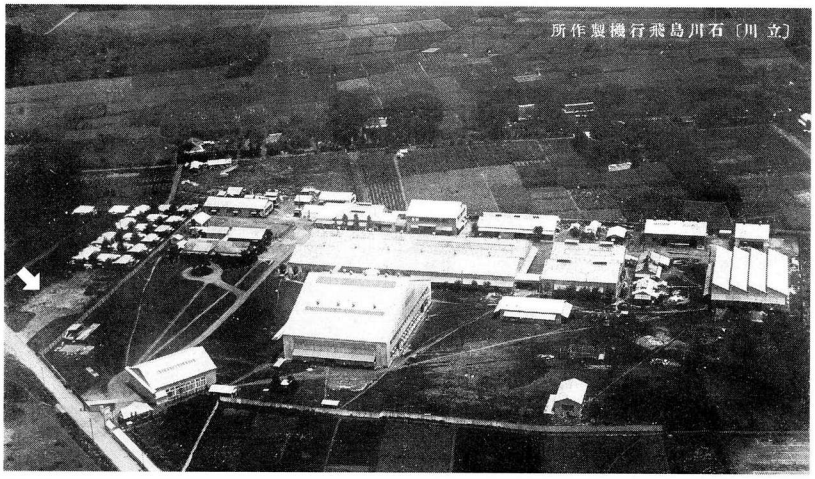
【写真２④】 愛国１号の背景に写る同庫（写真２③）。愛国１号が立川から命名式会場の代々木練兵場に向かう日（昭和７年１月10日）の朝の撮影と推測する。なお、数年を経ずして、本庫の隣に航空技術研究所（航空本部技術部が改編）の新飛行機庫が建築されている。昭和12年の九七式戦闘機の制式制定審議に使用された『九七式戦闘機構造要領』（昭和12年12月）に掲載されている試作機の写真などに写るのがそれであるが、まだ情報数が少なく、本記事への掲載は断念した。



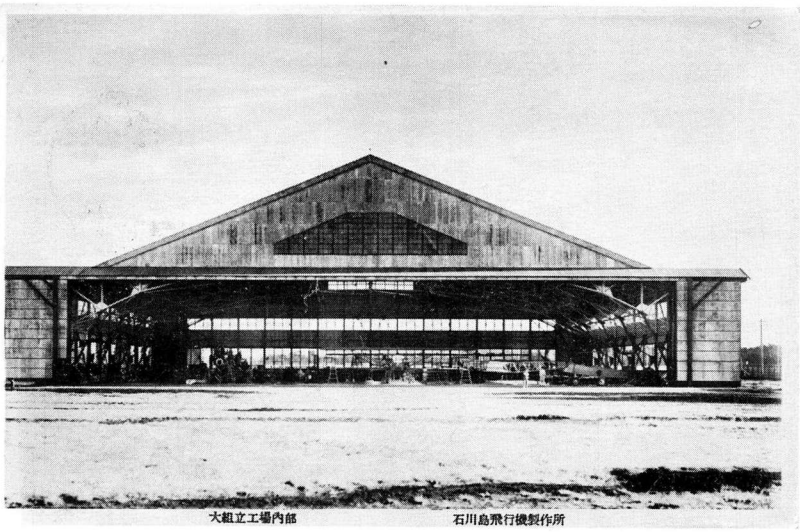
【写真２⑤】 昭和８年５月の昭和天皇の陸軍航空本部技術部への行幸を記念した写真帖『航空写真帖』からで、西側から見た技術部の飛行機庫の裏側を見ている。準備線近くの機体は、画面左が九一式戦闘機、右が九三式重爆撃機。技術部の正門（矢印）が画面右端に覗いている。（『航空写真帖』（昭和８年８月、陸軍航空本部）から）。



【写真３①】 飛行第五連隊の飛行機庫群と、奥（画面上方）の石川島飛行機製作所の工場。現在では、手前の飛行第五連隊の飛行場に面している５つの飛行機庫と、開口部がこちらを向いている整備隊格納庫の間の通路部分を、多摩モノレールが走っている。飛行第五連隊の北東に建設された石川島飛行機製作所のうち、大きく目立つのが大組み立て工場である（当時の絵葉書から）。



【写真３②】 同工場（写真３①）を別角度から写した写真。ほぼ中央に見える大組み立て工場と、その奥の細長い工場は現存しており、貸し倉庫として現役稼働中。その貸し出し時の資料では大組み立て工場が昭和６年１月の築、奥の工場が昭和３年１月築。事実ならば、本工場のなかで一番最初に建てられた建物になる。なお、画面左端にある建物の撤去跡（矢印）は、東京日日新聞社の格納庫跡。昭和６年８月の羽田開場からすぐに同社は羽田へ移転しており、昭和６年秋から翌年すぐの間の撮影と推測する（当時の絵葉書から）。



【写真３③】 大組み立て工場を正面から見た一葉。前記した貸し出し時の資料では、幅37m・奥行39.4m、624坪となっている。中の機体は、画面左が九一式戦闘機、残る３機が八八式偵察機（当時の絵葉書から）。

【写真３④】 現存する大組み立て工場を、多摩モノレールの高松駅から見た写真（2009年７月、筆者撮影）。屋根上に見える４つの突起は換気口で、建築時にも見えている。昭和６（1931）年１月の築ならば、2016年で85年を経過している。建築史跡としても航空史跡としても、残っていてほしいと思うのは、筆者だけではあるまい。